

2025 年6月 22 日 聖霊降臨節第 3 主日礼拝

メッセージ「低みからの見直し」

牛田匡牧師

聖書 使徒言行録 17 章 22 – 34 節

今回の聖書のお話は、宣教者パウロがギリシアの町アテネに行った際のお話でした。「アレオパゴス」というのは、「アレスの丘」という意味で、古くは裁判が行われていた場所であったようですが、今回のパウロとアテネの町の人たちのように講演や議論、議会の場としても使われていたようです。22 節でいきなりパウロは「アテネの皆さん、あなたがたがあらゆる点で信仰の篤い方であることを、私は認めます」と、如何にも嫌味な口調で話し始めますが、この言葉の背景には 16 節にあるように「パウロはアテネの町の至るところに偶像があるのを見て、憤りを覚えた」ということがあったようです。

アテネと言うと、今日では世界遺産にもなっているパルテノン神殿が有名ですが、紀元前 5 世紀に建てられたその神殿にも多くの神々の彫刻があったように、パウロがアテネに行った際にも、町の中に様々な神々の像が並んでいた、ということがあったようです。「ヘブライ語聖書」では、律法で繰り返し「偶像崇拜の禁止」が説かれていますし、ファリサイ派として教育を受けていたパウロにとっては、異教の神々が様々な人間の姿かたちで作られているのが、許せなかったのでしょう。そのようなパウロの憤りの気持ちが、いきなりアテネの人たちに対して、上から目線で畳みかけたのだらうと思います。

23 節です。「(私が)道を歩きながら、あなたがたが拝む色々なものを見ています、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけました。だから、今から私が、あなたがたが知らずに拝んでいるものをお知らせしましょう」……。いきなり町にやって来た見ず知らずの外国人が、このようなことを言い出したら、町の人たちはどのように感じたでしょうか。21 節には「すべてのアテネ人やそこに滞在する外国人は、何か耳新しいことを話したり聞いたりすることだけで、時を過ごしていたのである」とあるように、暇つぶしに色々な議論をしたり、聞いたりすることを好んでいたようですから、パウロのこともきっと「変なことを言う奴だな」と訝しく思いつつ、「まあ、とりあえず聞いてみるか」という姿勢だったのではないかと思います。

24 節以降、パウロは続けました。「私がお伝えする神は、この世界の天地万物を

作られた神であり、その神が人間が作った神殿に住み、人間が金や銀や石で作った像の中にいるはずがないだろう。神はこのような無知な時代を大目に見ていてくださいましたが、今は皆に悔い改めるように命じておられます」とというような主張でした。このようなパウロのお話を、パウロの側から、キリスト教を宣教する側から読んでみると、話の筋が通っていて、分かりやすく聞こえます。しかし、この話を聞いたアテネの人たちにとっては、どうだったでしょうか。初対面の人にいきなり、「あなたたちが大切にして拝んでいる神殿や、神々の像は、偽物ですよ。そんな人工物に神が宿っていると考えるなんて、ナンセンスですよ」と言われたら、誰だったいい気持ちはしないのではないかと思います。

現代の日本を舞台に考えてみても、そうだと思います。多くの人たちが訪ねる有名なお寺、たくさんの仏像が並んでいるお寺に行って、「こんな人間が作った木や金の像に神が宿るはずがないから、これらは全部意味がない。偽物に過ぎない、無価値だ」とでも言ったら、さぞ反発を買うことは間違い無しでしょう。私は以前、そもそも「仏像とは何で、人々は仏像の前で何でお経をあげるのか」ということについて、僧侶の方からお話を聞いたことがあります。もちろん、仏教の中にもたくさんの宗派がありますから、理解も多様だとは思いますが、その方が言うには、「目に見えない仏様を身近に感じ、思い浮かべ、信仰するための手段、道具である。景色を眺めるための窓である。窓がないと、どこからどのように景色を眺めてよいか分からないが、窓があることで、眺め方が分かる」というものでした。さらに「仏像によって姿かたちは目に見えるけれども、その声は聞こえないから、私たちは仏様の言葉であるお経を読み上げることで、仏様の声を耳から聞くことができる」というものでした。そのような話を聞いて、私は「なるほどなあ」と思い仏像という文化への理解を深めました。

それにまた「ヘブライ語聖書」の中の物語を読んでも、「偶像崇拜はしてはならない」と語られる一方で、人々は何度もあちらこちらで神の像を作っては怒られたということが記されています。それこそ、その後のキリスト教でも、彫刻や絵画など「キリスト教美術」と呼ばれる分野も確かにありますし、目には見えない神を、目に見える形で表したい、という思いは、いつの時代でも、ギリシア世界に限らず、アジアの仏教の世界に限らず、どこの世界に限らず、世界中で広く、人々の中に

確かにある思いなのだろうと思います。

そもそも、改めて聖書を読んでみますと、聖書の中で禁止されている「偶像崇拜」とは、「神の像を人の手で形作り、聖書に記されている命の神ヤハウエ以外を信仰してはならない」ということではないということが分かります。ですから、「キリスト教以外は間違った宗教で、誤った信仰だから、本当の正しい神様を教えてあげないといけない」ということでは、もちろんありません。聖書の中で禁止されている「偶像崇拜」とは、言い換えれば「貪欲」「自己中心・利己主義」のことであり(コロサイ3:5、エフェソ5:5)、自分の都合のために、自分で神の像を作り、その権威を利用して、他者を抑圧したり搾取したりするということです。聖書が何度も繰り返し禁じているのは、そのような自分自身を神とするような思いをふるまいのことですから、今回のアテネでのパウロのお話は、異教の神々の像を作って拝んでいるアテネの人々を見下して語っていたパウロの方こそ、偶像崇拜をしていたというように理解することができます。

32 節には、如何にも「死者の復活」、イエス様の「死からの引き起こし」ということについてだけ、アテネの人々に理解されなかった、受け入れられなかったかのようには記されていますが、パウロの話を聞いた多くの人々が、パウロの前から立ち去っていった原因は、初めから終わりまでのパウロの姿勢にあったと考える方が、妥当だと思います。アテネでも何人かは信仰に入ったと記されていますが(34 節)、大多数からは拒絶されたのだと思います。その後、続く 18 章でパウロはコリントに移動しますが、その時のパウロの心境が、「コリントの信徒への手紙 I」2 章に記されています。「そちら(コリント)に行ったとき、私は衰弱していて、恐れに捕らわれ、ひどく不安でした」(3 節)……。何故なら、アテネではひどい失敗をして、自分自身でもショックを受けていたからです。コリントでは人々に語るにあたって「優れた言葉や知恵を用い」ず(1 節)、「私の言葉も私の宣教も、雄弁な知恵の言葉によ」らず(4 節)に語ったというのは裏を返せば、アテネでは自分自身の優れた言葉や知恵、訓練を受けた弁論術などを駆使していた、ということでしょう。今の言葉で言えば、聴衆たちを「論破した」という所でしょうか。

しかし、そのような「上から目線」の言葉や振る舞いは、人々の反発は買えども、人々の心に響き、人々を動かすことはありませんでした。だからこそ、コリントでは

パウロは自分自身の知恵や力に頼って、理屈を語るのではなく、ただ神の力によって、イエス・キリストの十字架の出来事のみを語るようになったのでした。それがパウロにとっての手痛い失敗を通しての学び、低みからの見直しとなりました。

今回の「使徒言行録」17章30節で「人は皆、誰でも悔い改めるように命じられている」と述べられている「悔い改め(メタノイア)」という言葉は、ヘブライ語では「立ち返り(シューブ)」と訳されている言葉の翻訳です。「異教の神々への信仰から、真実の神ヤハウェへの信仰に立ち返れ、改宗しなさい」という意味で理解したり、また「自分自身の内面を見つめて、邪な思いや罪を悔い改めて反省しなさい」という意味で理解されたりすることがありますが、元来は「方向転換」「考え方や価値判断の基準を変える」という意味です。ですから、偶像崇拝で自己中心の利己主義で、人の上に立ち、「上から目線」で、理屈を並べたてて相手を論破するということから、むしろ足を踏みつける側から、足を踏みつけられる側に立ち、低みから見直すということ。命を守り命を活かす道は本当はどこにあるのか、全ての命を作られた神様が喜ばれる生き方はどこにあるのか、それを低みから見直して発見するという。そのようなことこそが求められているのだと思います。

低みからの見直しを経たパウロが宣べ伝えた「イエス・キリストの十字架」と、その「死からの引き起こし」とは、命は暴力によって滅ぼし尽くされることはない、最後に勝利するのは命を傷つける暴力や抑圧、罪ではなく、低みから立ち上がる神の力と共にある命であるということです。人としての知恵と力に満ち溢れ、失敗することなど決してなく、人々に対して雄弁に語りかけ、扇動することが伝道なのではなく、イエス様が歩まれたように、隣の人を大切にすること。相手の方が大切にしているものを、私も大切にすること。そのような自分自身の振る舞い、姿勢を通して、そこに共に働いておられる神様の業を示していくことが、他でもない「伝道」、「道の宣べ伝え」なのだと思います。自分自身の小ささ、無力さ、失敗を認めることはなかなか難しいこと、恥ずかしいことかもしれませんが、だからと言って神様から見放されるということはありません。低みから見直す時にこそ、神様が共にいてくださることが感じられるのではないのでしょうか。私たちは今日もそれぞれの場にあって、神様によって神様と共にあって、用いられていきます。